

水上実喜夫

Mikio Mizukami

勝山に暮らす市民を守りたい

12月に任期満了を迎える勝山市長選。昨年末、6選不出馬を明言し、市民参加型のまちづくりなど自身の「基本路線を守りつつ、さらに発展できる人にバトンタッチしたい」とし、後継候補として水上実喜夫副市長を挙げた。水上副市長に現在の率直な想いを聞いた。



水上実喜夫勝山市副市長

更紗 市長選に出馬するのか
率直なところ出馬するつもりでいる。現職の副市長でもあり、役職をしながら政治活動はできない。本来、6月末に辞職を予定していたが、コロナウイルス対策もあり先伸ばしにしている。それでは遅いという支援者もいるが今、辞職するわけにはいかない。
更紗 市役所勤務の思い出は
勝山市野向町に生まれ農家

の長男でもあり、地元で仕事に就きたいと市役所に入った。最初は総務課に配属され、区長会や公文書執務などの業務に携わった後、公民館を経て福祉事務所に異動した。

6年間にわたり障害者福祉を担当し「市民に寄り添い、市民のために働く」、これが自治体の仕事だと強く心に思った。特に、20代後半から30代初めの若い時なので、強く感じたのだろう。

当時は福祉政策の理念「ノーマライゼーション」、障害者も施設や家の中ばかりにいるのではなく、社会に出て健常者と同じような生活ができるように支援する取り組みが始まった頃で、担当者も少なく若いなりに頑張った。思い出も多く、これが市役所で頑張ろうという気持ちになった。障害者福祉から離れて久しいが、今でも心の中のウエイトが大きい。

市役所に36年間在職したが、

東日本大震災が発生した時、陸前高田や南相馬の被災地支援に十数回出向いた。被災地の現状を目の当たりにして自治体の役割を痛感した。もちろん勝山市が災害にあった時に「ああしよう、こうしよう」と思ったが、もっとダイレクトに今、困っている方に自治体が連携して何ができるだろうかと考えさせられた。

また、断続的だが企画に20数年携わり、計画づくりや政策づくりに従事した。児童福祉では子育て支援に力を入れ、商工観光ではまちづくりの企画や地域振興、観光振興に取り組み、市民が生きていくために地域経済の循環の重要性を知らされた。

更紗 市長選に出馬しようと思った動機は

地元、勝山で仕事があったの思いで市役所に入っただけで、何時か市長になろうかなどと思っていたのでは全くない。これまでの色々な地域の

人との活動や障害者福祉で出会った方々を通じて勝山を、企画の仕事を通じて市役所全体を知り、災害活動、市長の補佐も経験した。

色々な経験を通して勝山市の抱えている課題や市民の想いを聞きながら出来ることから対応してきて、勝山市のために、市民のために頑張りたいという気持ち少しずつ大きくなってきた。

更紗 何時ごろ、正式に出馬表明するのか

現時点で、山岸市長が6選不出馬を明言している。12月に私が20年仕えた山岸市長が退くことは確実だ。3、4月に辞めて選挙の準備をしようと思っていたが、それどころではなくなった。副市長としてコロナ対策に全精力を注いでいる。

コロナは全く想定していなかったことで、勝山市の産業、観光、福祉関連など新しいかじ取りが必要である。それだけ



水上実喜夫氏

Profile

みずかみ・みきお
昭和34年1月14日生まれ
京都学園大学卒
昭和57年勝山市役所入庁
平成25年4月企画財政部長
平成26年4月商工観光部長
平成31年3月定年退職
平成31年4月勝山市副市長
勝山市野向町北野津又
61歳

けに、これまで培ってきた経験を生かし、しっかりと市民生活の向上を図り勝山を守りたいという想いが強い。"勝山を守りたい。勝山に暮らす市民を守りたい"。

市役所の仕事を通して社会と関わり、これを一生の仕事としてきた。これまで一緒に苦労してきた何百人もの職員は仲間であり、これからも一緒に頑張りたい。山岸市長から後継と指名していただき有り難い。市民のみなさんのご支援がいただけるならば出馬したい。
だが、コロナ禍の中で副市長としての責任をしっかりと

務めなければならぬ。これが出馬表明しない一番の理由。副市長として迎えてくれた山岸市長や市会に対しても今できることを全力でやり、その結果を判断していただく。例えば、その結果が思わしくなくても後悔はない。

更紗 趣味や楽しみは

特にないが、年間2〜300冊、1日1冊のペースでジャンルに拘らず本を読んでいた時もある。子供が6人いるので子育てに費やした時間も多し。一番上の孫は小学6年生で、今は孫の世話が楽しみかな。